

【令和4年度 埼玉県児童虐待防止対策協議会】ブローハン聡氏講話

皆様、こんにちは。

改めまして、一般社団法人コンパスナビのブローハン聡と申します。この度は本当に貴重な機会をいただき、ありがとうございます。私の本日お話する内容としては、もちろん一般社団法人に勤めているというところもあるのですが、個人の経験体験というところに重きをおいて話をする内容となりますので、その内容が皆様にとって何かのお力になればと思い、お話しをさせていただきますので、どうぞよろしくお願ひします。それでは早速資料を準備させていただきます。資料は見えていますでしょうか。

ちょっと気合を入れすぎて資料を作りすぎて、少し早口になってしまうのですが、後程追えるように資料を見たい方はお送りするような形で、よろしくお願ひします。

改めまして、ブローハン聡と申します。

私自身の簡単な自己紹介なのですが、現在30歳を迎えたのですが、4年前まではNTTに所属をしながら通信販売の営業、そして芸能の活動をしておりました。JUNON BOY という全国で1万何人の中のトップ30位になるような大会で記録を残したり、左とか右下にある色とりどりの人がいると思うのですが、恋愛リアリティ番組に出させてもらった経験もあって、タレントのような活動をしておりました。このような場にふさわしくないのかもしれないのですが、僕の恋愛を語った回なのでYouTubeで「ラブポーカー」と調べていただければ、ちょっと黒歴史な部分もありますが、ぜひ見ていただければと思います。他にも海外にバックパッカーで行ってみたり、国内をヒッチハイクで日本一周してみたりといったことを20歳から26歳までしておりました。

そんな中で、4年前にカナダの当事者である児童養護施設を経験した若者たちが自分たちの経験を声にして、それを大人たちとパートナーシップを組むことによって政策提言を行う、そして自分たちの環境を変えていったという話を聞きました。

日本でもちょうどそういった社会的養護を経験した若者だったり、児童養護施設だったり、本当に様々な当事者の子たちが発信活動をするというのを間近で見ている、何か僕も力になれないかなというところで、発信活動をスタートしました。

私が今日お話する部分の本当に一部なのですが、「虐待の子だった僕」ということで2021年10月8日に本を出版させていただきました。30年の歴史を綴ったものになるのですが、テーマは少し重いのですが、この虐待を受けた自分だったけれども関わる大人によって、関わる環境によって、大きくその子の人生を左右する、きっかけひとつあれば誰もが変える可能性を持っているというのを力強く書いた本になります。読みやすくサクサク読めたという話もたくさん聞きましたので、ぜひ通販や本屋さんに行った時に見ていただければと思います。

それとは別に、当事者の活動の一環としてYouTube番組ということでYouTubeの媒体を使って発信しています。

今日の事例でも、虐待で亡くなった話などがあがってきましたけれども、やはりそういったことに関心を持っている方はたくさんいるのですが、自分って何をすればいいんだろうと思って、見ている方々の背中を押せるような番組にしたい。なので、大人の方々には、認知活動、里親って何だろう、児童養護施設って何だろう、社会的養護って何だろうというのを当事者ならでは発信できることをやっています。この写真に写っている3名とも児童養護施設の出身です。

他にも児童養護施設にいた子たちや、施設に入れなかったこどもも含めて、そういった子たちに希望を持ってもらうような番組としてやっています。

こちらの番組ですが、見るだけで支援ということで、YouTube を見ると広告収入が発生するのですが、私たちの番組に若者を支援している団体がたくさん出ている。皆さんに見ていただいて広告が発生すると、その資金は出演してくださった若者の支援している団体に送るという形でやらせておりますので、皆さんが見ながら学びながらそれが若者たちの支援につながっているというコンセプトでやらせていただいております。名前は「THREE FLAGS 希望の狼煙」と検索して頂ければ出てきます。

今日は私が所属しているコンパスナビに関してちょっとだけ触れさせていただきたいのですが、埼玉県児童養護施設アフターケア事業として、埼玉県福祉部こども安全課様より受託し運営をする形でやらせていただいております。日々皆様には大変お世話になっております。

私たちが行っていることに関しては、今日はほとんど御紹介しないのですが、ざっくりまとめますと児童養護施設を離れた後の就労の支援、そして住居支援。先ほどご紹介があったのですが、クローバーハウスという居場所づくりで施設を離れた後も気軽に仲間たちと話せる場というのを作っております。

これからお話する内容に関しては、私が当事者として経験したことを簡単に共有させていただいて、そこから起こせるアクションって何だろうということを当事者目線として発信させていただきます。

私の生い立ちの部分なのですけれども、名前のおり外国のルーツを持っていることが分かると思うのですが、母親フィリピン人で父親が日本人で、そのミックスルーツで私が生まれてきました。当時フィリピンの方が日本に来られる目的の多くは、自分の家族に仕送りをするために日本で稼いでそれを家族に送るということでした。そのためフィリピンパブ、スナックのようなところでお母さんが働いていました。そんなある日、僕のお父さんにあたる方と出会ったのですが、既婚者で既に家庭を持っていたため、私は認知されず、無戸籍、無国籍として出生しました。

一番下に書いてあるとおり、もしかしたらなかなか聞かない話かなと思うのですが、母子手帳を不正に取得、100万程度と書いてあるのですが、私は苗字がなかったために聡という名前だけあったのですが、誰かの知らない母子手帳を使って病院に通っていたんですね。当時の名前は違う苗字があって、〇〇聡という苗字があって病院に通っていました。

私の本当に一番幼い時の記憶が、お母さんがフィリピンパブで働いているために、働い

ているのですがお金はあまり稼げていなくて、ライフラインが止まっているということがよくありました。電気も止まっているし、水も止まっているしという状況だったのですが、蠟燭に火をつけて炎がゆらゆら揺れているのを朝まで我慢して見ている、そしてお母さんが帰ってくるのを待っている、そんな生活を0歳から4歳までしていました。

4歳から新しいお父さんとの生活が始まったのですが、その新しいお父さんが一番最初に僕に言ったことばというのが「俺のことはお父さんと呼ぶな。お兄さんと呼べ。」ということからスタートしました。そのお兄さん、なぜそのような言い方をしたのか今の歳になって分かったのですが、自分のことは子どもとしては認めず、連れ子なので自分の子にはしないよという意味で、お父さんと呼ぶなと言ったのかもしれないなと思っています。

先ほど質問にもあがっていたのですが、私自身は無戸籍・無国籍だったこともあり、保育園や幼稚園に行かずに家で過ごす環境で育ってきました。

その頃にはお母さんがフィリピンパブで働いているのですが、義父との関係はそれほど良くなくて、ストレスでたばこを始めていたり、ギャンブルでパチンコをよく打ちに行っていたというのが、私の幼い時の記憶であります。

そしてそのお兄さんと住み始めた直後、虐待の数々ということで、ちょっと書き切れなかったのでここまでにしたのですが、このような種類の虐待を受けてきました。大体やられる時間帯というのが、お母さんが働いている夜の時間帯でございまして、フィリピンパブで働いている間は僕にとってすごく怖い時間が訪れます。そしてお母さんが帰ってくると、お母さんがいる間はやられないので、僕にとってお母さんはすごく安全・安心できる拠点というか、本当にお母さんがいる時だけは安心して過ごしていました。

よく聞く質問かと思うのですが、僕が当事者として何でSOSを言えなかったのかという理由を伝えます。それは2つ主にあって、届かない祈りと母親への愛情。

私のお母さんは、フィリピン人で、宗教上キリスト教を信仰している方で僕が家に帰ると当たり前神様の像があったり、食卓を神様が見守ってくださっているというのが当たり前だったので、私は「いただきます」をする代わりにお祈りをします。寝る前にもお祈りをします。これが僕の中で習慣化していたので、神様という存在が自分の中になんともなくいるんじゃないかなと、当たり前にいるような感覚がありました。先ほどお話をしたのですが、そういうのが当たり前で毎日お祈りをするのです。

一番お祈りをするのが夜の時間帯です。お母さんが働きに行っている間。お兄さんが家に帰ってきて、鍵をドアノブに刺して回して足を玄関に一步入れた瞬間に、この人は今日酔っぱらっているのか、機嫌が悪いのか、すごく怒っているのかというのが、足音一步でわかるのです。その足音が、自分の寝ている寝室と二人が寝ている寝室とふたつあるのですが、足音がどンドンドアから近づいてきて自分が寝ている所のドアを開けられたら、今日はやられる日だ。この玄関から寝室までの間、一番お祈りをするんですよ。今日はやられませんかように、今日は絶対やられませんかようにとお祈りをします。

ドアを開けて、すごく本当に怖かったなと思うことは、寝ている時に枕を横に乗せてジャンプをしたり、爪楊枝を頭に刺したり、顔中わさびやタバスコを塗ったり、首を絞めた

り、サッカーボールのように蹴ったり、包丁を投げつけようとしたり、本当に様々なことをされていたので、いつもいつもお祈りをしていたのですが、当時の自分としては、こどもの時の体験としては、そのお祈りが届かなかったという思いがありました。ですので、神様よりも強い存在というのがこのお兄さんなのだな、僕は絶対服従のイメージがあったので、この人から逃げられないという気持ちがありました。

母親はすごく愛情を注いでくれました。離れていても、例えば電話で「I love you. I miss you. I need you.」という言葉がいつもかけてくれていたので、自分の中ではその言葉を聞くと愛されているという安心感や母親がいる間は守られていたという気持ちがあったので、母親の愛情はすごかったのですが、もし僕が仮にこのことを母親に伝えてしまったことによって、二人が口論した末に、お母さんに暴力の矛先が向いたらどうしよう、そんなことを小さいながらに思っていたので、お母さんを守らなくちゃいけない、というところで私はお母さんには言わずにいました。

これが、私が SOS を言えなくなった理由です。

それから、7歳から11歳までの間に学校に通うことができました。おそらくその母子手帳を使って学校に入ったのではないかと推測するのですが、事実はわかりません。

私は、家は安心できる場所ではないと思っていたのですが、学校に行った時には、全校生徒25人の墨田区の小学校だったのですが、外国人のハーフが当たり前とその学校にいたので、当時あまり言語を話せなかったです。お母さんがフィリピン語、タガログ語を話していたために。ですが学校で丁寧に教えてくれたおかげで、今では普通に皆さんの前でこうしてお話できるようになりました。

学校に行くと友達と遊んだりゲームしたり普通に過ごすのですが、家に帰るとすごく気を遣って、また学校に行くと自分を全力で出せるという、家と学校と地域で言うと、学校と地域が僕の中では唯一安心できる時間帯でした。

そんな自分が誰にも SOS を出せなかったところなのですが、小学5年生の頃に学校の先生に保護されたのですが、そのきっかけとなったのが、お兄さんからライターで炙られていたことがきっかけとなりました。よく服の内側などにやられるのですが、結構耳にもやられる、虐待って耳にやったりする傾向があって、私はよく耳を燃やされていたんですね、ライターで。それとは別にお尻もよく、臀部も燃やされていたのですが、ライターを当てられていたのですが、あまりにも熱すぎて、あまりにも痛いので一回気を失うんですね、自分の感覚として。その意識がちょっと飛んで、やられている間は自分を外から見ているような気持ちになります。

虐待行為が終わると、身体に戻ってきます。そんな風に何とか毎日を乗り切ってきたのですが、やけどの部分があまにも熱すぎて、学校で出席確認をした時にうまくまっすぐ座れませんでした。左のお尻の部分と洋服が擦れるところが、何とか擦れないように右に体重をかけていたら、これで学校の先生が何か変だと思い、気付いてくれて、そのまま僕を教室の外に連れて行き、色々質問をしました。

僕からすると何か言ったらばれてしまう、絶対言わないようにしていたのですが、隣の

担任の先生も来て、養護担当の保健室の先生も来て、副校長先生も校長先生も来た時に、これはいよいよ言わなければいけないなど。当時140センチしかなかった自分は、大人の大人5人を目の前にした時にすごい圧があって、これは言わなければいけないなという思いがあって初めて言いました。

何かを言った後に、お尻をめくられてやけどの跡を確認されたのですが「ああ、やっと助かった」とは一切思っなくて、その時の自分としては「ついに見つかった。ついにばれてしまった。」と血の気が全身からサーっと下がったのを今でも忘れないです。

この後自分はまた今日よりひどくやられるんだろうなと覚悟していたんですけども、そのあと実は家に帰ることなく、児童養護施設に行ったというのが、私の保護されるまでの経緯です。

先ほどデータにも出ていたのですが、今ざっくり虐待件数が、相談件数が20万件を超えて、一時保護件数も3万件、そのうち施設に入れるのはだいたい5千人ほど、全国で4万6千人の子どもたちが親から離れて社会的養護の中で育っています。

毎年だいたい2千人の子どもたちが施設や里親から離れていきます。

また、虐待の数で言うと、一年間に死亡する子どもを5千人とすると350人が虐待死の可能性があって、うち150人は虐待死の可能性が極めて高い。なので一週間に1人以上虐待によって命を落としている、そういった現状があります。

私は本当にラッキーだなと思っています。先ほどの事例で見ていたニュースの向こう側だったかもしれないという風に、いつもこういった事件を見ると度々胸が痛むし、自分事として捉えるのは、やはり、自分が経験者だからだと思っています。

私はSOSを発信しなかったのですが、先ほどのYouTubeメンバーのひとりがアンケートを取りました。それは全国の虐待経験がある若者達から取ったアンケートになります。

ここからカラーものもが多くなり目がチカチカするかもしれませんが、うまく見ていただけたらと思います。

虐待を受けた児童・生徒のSOS発信に関するアンケート調査なのですが、去年、一昨年の6月6日から7月7日の期間の間に1,005人の若者がアンケートに答えてくれました。今日全部は紹介できないので要約なのですが、アンケート調査から分かったことは、4人に1人が先生に相談できた。相談した時期は中学校在籍時が最も多い。相談した相手が担任の先生が最も多い。他には警察だったり、友人、その他といったところで残りの50%があるのですが、多くは学校の先生に相談したことが分かっております。

要約で色々書いてしまったのですが、下の黒文字のところ、太文字のところを見ていただくと先ほどの50%の中に、先生に相談して良かったと思うことは、しっかり話を聞いてくれたという感想が多かったです。そして話を聞いたことで虐待を受けた方がひとりではないということを実感できた、ということをお二人が言っていました。

一方で、先ほど僕の中でも血の気が下がったという話につながるのですが、相談したことを断りなく親に伝えたり、親の味方をされ責められる、こうした対応は非常に危ないと私は当事者ながら感じています。

その中で私は学校でできることとは何だろう、半分の子どもたちが虐待を受けている時に家庭や地域に出て、家庭から学校・地域というところで育っていく中で、学校でできることはないかなと4つまとめてみました。

まず1つ目。虐待対応の手引きを現場の先生まで届けてほしいという気持ちがあります。文部科学省から出ている「虐待対応の手引き」というものがあります。なぜこちらを出したかと言うと、私自身小学校の先生に向けて講演する機会があって、今のような話をする、やはり早期発見の重要さだったり、自分が繋がれた命で先生たちがすごく大事な役割があるんですということを伝えると、皆さん普段からアンテナが、日常生活のアンテナが上がったりするのですが、フィードバックされたアンケートの中に、どう対応して良いかわからないとか、こういった対応の手引きがあることを知らなかったという方が出てくるんですね。私は川口の小学校を何校かまわらせてもらっただけなのですが、その中でもそういった手引きがあることを知らないということ自体が、もしかしたら非常にまずいのではないかと、個人的に思っております。

各校長先生たちが必ず現場の先生がこういった手引き、対応、虐待の発見時どう対応したら良いのかということ組織レベルでちゃんと見てほしいなと思い、①を掲げました。

2つ目。虐待防止研修というので、各学校でそういった研修が行われていると思うのですが、実際にここに当事者の声を入れてみたらいかがでしょう、ということです。当事者の声といっても渦中にいる子とか、すごく話すことで苦しくなってしまう子はやはり今ではないかなと思うのですが、私のように次の世代にこれを起こしてはいけないと思って立ち上がって動いている若者がたくさん今出てきています。そんな若者たちを当事者の声として、是非先生たちに向けて話してみたいなと思っています。

私の後輩も学校に入って話をしたのですが、やはり普通の座学を受けているより、すごく身近に話を感じていたり、子どもから出てくる言葉はすごくヒントがあったりするんですね。そんな声を是非届けたいなと思って、当事者の声を反映してほしいと思いました。

私は2年前から小学校をまわったのですが、そこから15校程度なのですが、早期発見に3件繋がったんですね。これはすごいことだなと思っています。なぜかと言うと、私は先ほどの何十万件相談件数があって、社会的養護にたまたま入れましたけれど、その1件が今度3件の命を繋いでいると思うと、こういったバトンされることはすごいことだなと思ったので、是非当事者の声を反映させていただけたらなと思います。

私は言語を話すのがすごく難しかった場面があったりとか、文字は読めるのですが文字が浮かび上がってきたりという、文章能力、言語化するというのが当時難しくてなかなかできなかったのですが、代わりにこんなことはどうだろうと思いました。

子どもたちが自分達で付けられるもので、例えば今日の心模様は何色だろうとか、例えば下を書いてあるような、今日はにっこりマークなのかな、今日は怒っている気持ちなのかなという。これは言語ではなくて、今一番近い気持ちを表そうと思って絵で描いて表現

できたりします。

これをする事によって、1年生から中学3年生、または1年生から小学6年生まででも良いのですが、子どもたちが嘘をつけない時期というのがある、1年生から3年生は特にそのまま素直に表現するので、そういった変化というのを日常の中からヒントを得られるのではないかなと思ったので、毎日付けられる記録として、こういったものを取り入れていけたらなと思っています。

4つ目、こどもから発信できる事ということ、最近学校で支給されるタブレットがあると思うのですが、タブレットからつながるSOSがあっても良いのではないかと考えています。画面の左下右下右上に本当に1例なのですが、「あなたの居場所チャット」という24時間チャットできるサービスがあったり、文部科学省で「24時間こどもSOSダイヤル」があったり、「Mex（ミークス）」という10代のためにも窓口サイトがあります。これは色々な支援団体がやっていたり、行政のものとしてやっているのですが、こういった資源を活用できないかなと思っています。

アンケートの中に中学生ぐらいから虐待を先生に相談できるという話があったと思いますが、小学5年生からだいたい中学3年生ぐらいまでの間に、親ってちょっと変だなと思ったりする可能性が増えてきます。その時にこういったタブレットを活用することで、誰にも相談することなくタブレット内でちょっと見て、もしかしたら自分も行けるかもしれないという考えになるのではないかと考えて提案させていただきました。

ちょっと駆け足になるのですが、海外の事例を紹介させていただきます。スウェーデンで、今の日本に近い状態から虐待が減った成功例のひとつになります。

体罰自体を法律を変えて、それは良くないよねという風になっていったと思うのですが、それだけではなく大規模なキャンペーンを実施した。これはキャンペーンの多くは行政が主導でやっている、政府が主導でやっているというところがすごくポイントです。

実際にどんな取組をしたかという、全世帯に冊子を配布。子育てをする世帯に配布をしました。「こどもを叩いて育てられますか」という14ページの冊子なのですが、これがひとつ。

あとは親子間で法律について知ることができるようになるためとか、虐待や体罰について話し合いができるようにするために、牛乳パックに改正法について情報を載せていたんですよ。身近なものにそういったメッセージを掲載する。それとは別に「こどもの命はすごく大事だよね」というコマーシャルもたくさん流していました。そして、家庭内暴力や権利について、本や学校の授業で導入する。そして出産前後の親にアプローチすることで一人の人が親になる前から、親へのアプローチをする。こんな取組をしました。

40年前にそれを始めて2018年、4年前ですね。体罰をしなくなったんですね。極端な例なくらい下がっているのですが、親自身が体罰は駄目だということを言っていたり、本当はしたくないんだけどという方を含めて、最初は虐待をしていないということも言っていたのですが、だんだん体罰自体が良くないという認識、キャンペーンなどのおかげで体罰を容認しなくなってきた。何がすごいかと言うと、今、体罰を受けていない子どもた

ちが子育てをするということ、今後どうなっていくかすごく楽しみなんですね。こういった海外の事例があるので日本でも絶対できるのではないかと、当事者ながら思っている、海外の事例を参考にするのは非常に大事なかなと思っています。

今のは、実は私たちが Three flags が YouTube で発信しているので、是非ここはまた YouTube を使って見ていただけたらと思います。

虐待されているこどもは、本当に逃げる選択肢を知らなくて、親にしがみつくしかできない。親たちも虐待ということに気付いていない場合もあるので、子どもたちを救い出し親も支えなければ、虐待をされている子どもたちも親達も救われぬ。そういった中で専門家が間に入ることで、こどもや親を救うきっかけになる。

私がひとつ提案しようと思っていたら、既に令和4年度の部分で出ていたのですが、他機関を繋ぐハブとなる機関はすごく重要だと思っています。現状では情報があっちにいたりこっちにいたりするのを、ちゃんと間に入るハブを担う機関があったら良いのではないかな。

私が知識不足な部分もあってそんなに多く調べられなかったのですが、先ほどの要対協の話が出てきました。要対協がこのハブになっていく、非常に大事だなと思う中で、実際に「NPO 法人つなぐ」がやっているところがまさに、そういった必要な研究とか研修とか、実際の事例などを用いて要対協と提携してやっているんですね。神奈川県のようなモデルも視察しに行くというのも、ひとつの手ではないかなと。「つなぐ」からそういった話をいただきました。

最後に、私が考える虐待をなくすには虐待する親を責めるだけでは解決しない、僕達は川下で流れて泣いている子どもたちを、どうしよう、どう助けようといつも話し合っているのですが、やはり川上で泣いている大人や親にも目を向けないといけないよね、親子まるごと支援の方向に向かっていかないといけないよね、という考え方を私は持っています。

その中で実は虐待をしてしまった親を支援するマイツリーという支援団体があります。虐待した保護者の回復支援プログラム、こういったものが民間の団体であります。

また、埼玉県の取組の中で、SNS を活用した相談窓口だったり、民間で行われている相談窓口。こういったものが親に全然届いていないのではないかと、私は思っているので、学校や病院など親が関わる所で、こういったものが目に触れる機会をたくさん作ってあげることによって、ふと思い出して、こういったところに繋がっていくのではないかなと思っています。

全部ではないのですが、家庭がうまくいかない、地域でうまくいかない、ト一横キッズなどが今ニュースで話題に上がっていきなりしますが、不登校の数が20万件、子どもの自殺数が473人、生活保護受給者の中で働けるけど、障害などを抱えていないけれど、18歳から40歳の中で12万人がいま受給している。総合計で156億円の税金がかかっている。こういった分かれ道はやはり最初に生まれ来る家庭・地域からスタートしているのではないかなと思っています。

キーパーソンとなり得る隣人が多く存在することは、すごく大事なと思っていますし、特にこどもの特有の世界では、学校や地域で関わる大人、橋渡しできる存在がすごく重要ではないかと思っています。

子どもの命を繋ぎ守るのは、社会に課せられた大きな使命だと思い、当事者ながら今でも発信活動を行っております。

ちょっと長くなりましたが、これにて終わりにします。

御清聴ありがとうございました。